

# 教育思想史学会

## 第26回 大会プログラム

---

2016年09月10日(土)、11日(日)

武庫川女子大学  
中央キャンパス 学校教育館

主催：教育思想史学会、協賛：武庫川女子大学

### 大会参加費

	一般	学生・非常勤
会員	3500 円	2000 円
非会員	4000 円	2500 円

### 懇親会費

一般	学生・非常勤
5000 円	3000 円

# 大会日程

## 09月10日（土）

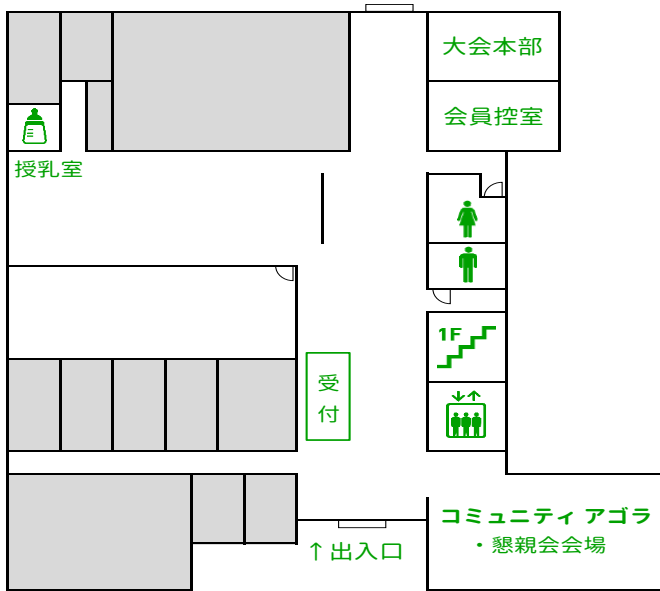
09:30 ~	受付（エントランスホール：1階）
10:00 ~ 13:00	<b>コロキウム1</b> （301教室） 〈教育思想史〉の誕生——ドイツと日本
	<b>コロキウム2</b> （302教室） 演技・〈ふり〉の教育思想史研究の可能性について
13:10 ~ 14:10	第9期 理事会・編集委員会 合同会議（205会議室）
14:15 ~ 14:30	奨励賞表彰式（210教室）
14:30 ~ 16:15	<b>フォーラム1</b> （210教室） H. アレントにおける「精神の生活」の政治性 ——〈自己とともにある〉ことと〈他者とともにある〉こと——
16:30 ~ 18:15	<b>フォーラム2</b> （210教室） アドルノの教育思想——自然と啓蒙の概念をめぐる——
18:30 ~ 20:30	懇親会（コミュニティ アゴラ：1階）

## 09月11日（日）

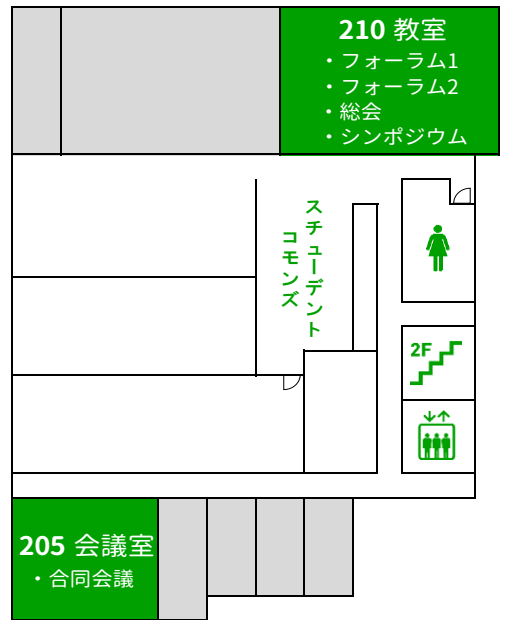
09:00 ~	受付（エントランスホール：1階）
09:30 ~ 12:30	<b>コロキウム3</b> （301教室） 超スマート社会における人間性と教育
	<b>コロキウム4</b> （302教室） ヌスバウムを読む
	<b>コロキウム5</b> （312教室） 「社会的なもの」と教育——政治的可能性に向けて——
13:30 ~ 14:15	総会（210教室）
14:30 ~ 17:30	<b>シンポジウム</b> （210教室） 教育と宗教——信仰と生の本来態

# 会場案内図

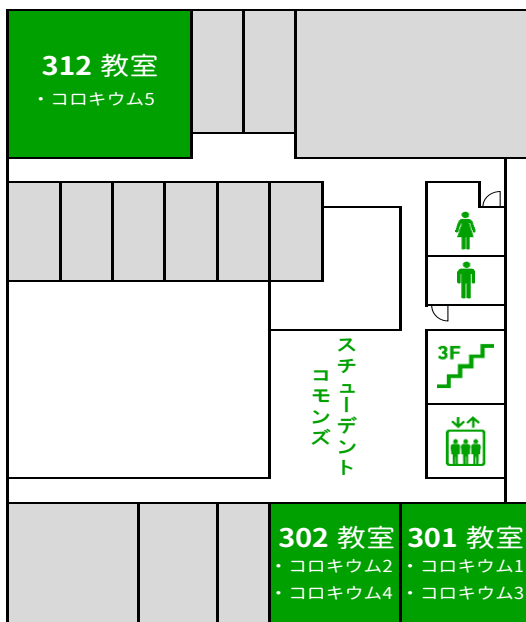
## 1階



## 2階



## 3階



### ⚠ 会場利用に関する注意事項

- \* 教室内での**飲食は禁止**となっております。1階の「コミュニティ アゴラ」、2階や3階の「スチューデント コモンズ」をご利用ください。
- \* **男性用トイレは奇数階のみ**の設置となっております。
- \* 構内は**全面禁煙**となっております。構外にて喫煙くださいますようお願い申し上げます。
- \* **出入口はオートロック**となっております。
- \* 1階には「授乳室」がございます。

09月10日(土)

コロキウム1 (10:00~13:00) 301教室

## 〈教育思想史〉の誕生——ドイツと日本

企画者・司会者

下司 晶 (日本大学)

相馬 伸一 (広島修道大学)

報告者

鈴木 宏 (武蔵丘短期大学)

尾崎 博美 (東洋英和女学院大学)

日暮 トモ子 (有明教育芸術短期大学)

塩見 剛一 (大阪産業大学)

コメニウス、ルソー、ペスタロッチ、ヘルバルト、デューイ……等々。私たちの親しんでいる「教育思想史」像は、どのようにして生まれたのか。本コロキウムでは、その成立と普及の過程を問いなおしたい。

教育思想史テキストの嚆矢は、ドイツのラウマー及びシュミットがそれぞれ著した『教育学史』であるといわれる。これらのテキストと相前後して、フランス、イギリス、アメリカでも追随する動きがあり、日本では明治20年代に、これらの欧米のテキストの翻訳を通じた受容が盛んに行われた。しかし、このような列伝的・通史的な教育思想史がどのように成立し、どのように広まっていったかに関しては、これまで十分に検討されていない。

そこで本コロキウムでは、ひとまずラウマーの『教育学史』と、明治期日本の教育学テキストに焦点を当てて、私たちの知る「教育思想史」の形成過程を明らかにしたい。その上で、最近邦訳されたレーブレ『教育学の歴史』に関して、その成立過程と特徴を解明する。これらの試みは、本学会が拠って立つ暗黙の前提を検討することにもつながるだろう。

## 演技・〈ふり〉の教育思想史研究の可能性について

企画者・司会者

藤川 信夫 (大阪大学)

報告者

藤川 信夫 (大阪大学)

広瀬 綾子 (梅光学院大学)

岡野 亜希子 (近畿大学)

このコロキウムでは、大阪大学の藤川が研究代表者として行ってきた学際的共同研究「教育と福祉のドラマトゥルギー」と、長崎大学の山岸賢一郎会員や九州大学の藤田雄飛会員を中心として行われてきた共同研究「〈ふり〉の教育哲学」の研究成果の一部を提示し、これを手がかりにして、演技や〈ふり〉に焦点を当てた教育思想史研究の可能性を探求する。「教育と福祉のドラマトゥルギー」は、社会学者 E.ゴッフマンの初期の著作群における成果をもとにして開発してきたフィールド研究における日常的相互行為分析のための観点であり、相互行為を舞台上での演技に見立てて分析するという点に特徴がある。

本コロキウムでは、まず藤川から「教育と福祉のドラマトゥルギー」の成果の一部を紹介し、日常的相互行為の演技性について考える。次いで広瀬からスタニスラフスキーシステムによる現代リアリズム演技のための俳優養成の方法を紹介し、舞台演劇におけるリアリティについて考える。その上で、教育思想史研究との接点を探るため、「〈ふり〉の教育哲学」の枠内でルソー研究を行ってきた岡野が研究成果を提示する。岡野は、内面と外面の一致した透明な交流を志向してきたルソーがなぜ『ダランベールへの手紙』においてある種の演技性 (spectacle) を推奨するに至ったのかという問いに取り組んできた。これらの成果を手がかりに、リアリティと演技、内面と外面、本音と建前、存在と現れの関係に着目した教育思想史研究の可能性を探ることができればと思う。

## H. アレントにおける「精神の生活」の政治性 ——〈自己とともにある〉ことと〈他者とともにある〉こと——

報告者

村松 灯 (東京大学・院生)

司会者

野平 慎二 (愛知教育大学)

活動、複数性、現われ……。アレントの思想を記述しようとするとき決まって引き合いに出されるのは、前期の主著『人間の条件』で展開された公共性論の諸概念である。全体主義を経験した後で、私たちは〈他者とともにある〉こと、そうした営みとしての「政治」をどのように理解し構築すべきか——アレントにとって、この問いは生涯を貫くものであった。彼女の公共性論は、その一つの応答として重要な位置を占めている。近年では、教育学においても、教育の公共性やシティズンシップ教育の文脈でアレントの議論が広く共有されつつあるが、その多くが前期思想に依拠しているのも理由のないことではない。

しかし、アレントにはもう一つ重要なモチーフがある。それが「精神の生活 (the life of the mind)」である。1961年にアイヒマン裁判を傍聴して以降、アレントは精神活動を主要な検討対象とした。彼女は思考・意志・判断を「精神の生活」と名づけ、それぞれ他には還元できない基本的な精神活動であるとする。「精神の生活」論は政治的悪への関心から出発したが、精神活動それ自体は概して非政治的なものとして論じられる。というのも、そこで問題となるのは他者には「現われていない」活動であり、〈自己とともにある〉ことだからである。同時に、そうした非政治的なあり方の内実は三つの精神活動で異なっており、それらは鋭く対立する。

だが、こうした後期アレントの議論は、前期の公共性論と一体いかなる関係にあるのか。それは、精神活動が公的なものとどのように連関／断絶しているのかを問うことでもある。本報告では、思考・意志・判断において、自己および他者がそれぞれどのように経験されるのかに着目して、精神活動の政治性の諸相を明らかにしてみたい。検討を通じて、アレントの前期と後期を架橋するとともに、教育の公共性や政治的主体に関する議論に新たな展望を示すことができればと考えている。

## アドルノの教育思想 ——自然と啓蒙の概念をめぐる——

報告者

白銀 夏樹 (関西学院大学)

司会者

今井 康雄 (日本女子大学)

本発表では、ドイツの社会哲学者アドルノの思想における自然概念と啓蒙概念の関係を明らかにしながら、この概念の教育的な現在性について、いくつかの論点を提示したい。

アドルノはホルクハイマーとの共著『啓蒙の弁証法』で、人類史を人間による内的・外的自然の支配の歴史ととらえることで、人間に解放を約束していた啓蒙が第二次世界大戦やファシズムのような野蛮に転化したと論じた。この主題は後の『否定弁証法』『美の理論』に通じるアドルノの中心的な思想として知られる。しかし彼は「アウシュヴィッツ以後の教育」などの教育論では、「アウシュヴィッツ以後」も続く野蛮の契機を断つために、社会的啓蒙としての教育が必要だと訴えていた。このアドルノの主張は『啓蒙の弁証法』の批判と矛盾しているように見える。

本発表では、この矛盾に二つの視点から迫りたい。まず、この矛盾を回避するアドルノの教育思想を再構成する視点である。これはある程度可能であるように発表者には思われる。もうひとつは、自然と啓蒙の概念の現在性を確認する視点である。アドルノによればこの矛盾は自然や啓蒙の概念そのものに内在している。そして歴史的社会的背景を辿りながらこの矛盾を明らかにする「内在的批判」によって、アドルノは伝統的な概念の現在における限界や意義を確かめようとした。本発表ではアドルノが自然と啓蒙の概念に認めた現在性を明らかにする。これは、「自然支配」ないし「人的能力開発」としての教育への批判(ベンヤミン・原聡介)や、「3.11以後の教育」といった問題圏にも触れる論点となるように思われる。



## 超スマート社会における人間性と教育

企画者

鈴木 晶子 (京都大学)

司会者

山名 淳 (京都大学)

報告者

磯部 洋明 (京都大学)

中村 泰介 (園田学園女子大学)

鈴木 晶子 (京都大学)

ICTの急速な普及とネットワーク化の爆発的な波及に伴い、人間をとりまく環境は大きな変化をみせている。人工知能、ロボットの研究開発が今後益々進展していくなかで、来るべき社会に対する懸念も拡大している。これまで人間がやってきた仕事をロボットが代替する未来社会では、人間にのみ可能な能力や創造性が問われるだろう。人間は、動物との比較だけでなく、今後は、人工知能やロボットなど機械と比較しながら人間性（ヒューマニティ）を探究していかなければならない。また、ソーシャルメディアの普及を通して、ヴァーチャルな世界におけるコミュニケーション不全や情報操作、負の感情の連鎖拡大など新たな問題も出てきている。超スマート社会（Society5.0）といわれる時代に求められる人間らしさや能力・資質について、また、ネット世界でのエチケットつまりネチケットや新たな倫理の検討は喫緊の課題である。本コロキウムでは、「超スマート社会を生き抜く人間」およびその人間の教育についての問いに対して、教育思想史の研究蓄積を踏まえた応答可能性について、会員諸氏と議論することができたらと考えている。

## ヌスバウムを読む

企画者・司会者

京極 重智 (大阪大学・院生)

報告者

高宮 正貴 (大阪体育大学)、松枝 拓生 (京都大学・院生)

浅井 健介 (京都大学・院生)、藤高 和輝 (大阪大学・院生)

京極 重智 (大阪大学・院生)

本コロキウムでは、アメリカの哲学者マーサ・ヌスバウム (Martha Craven Nussbaum, 1947-) の二つのテキスト——コスモポリタニズムや市民教育をテーマとした『国を愛するということ』、および、法や規範の感情的起源について論じた『感情と法』——を読解する。

ヌスバウムは、西洋古典研究、国際開発論、リベラリズム論、そしてフェミニズム論などのさまざまな分野において独自の議論を展開している。近年、教育学や教育哲学においても、ヌスバウムの議論に注目する国際的な潮流が見られる。本コロキウムでは、この潮流を受けながら、日本における教育思想史研究にヌスバウムの議論がどのような形で位置づけられるかを、読書会の形式で議論したい。

具体的な内容として、京極が先行研究をレビューしたうえで、高宮がコメントを加える。次に、浅井が『国を愛するということ』と『感情と法』を相互に関連づける報告を行い、藤高がコメントを加える。さらに、それらを受けて、後半の議論の口火を切るためのコメントと質疑を松枝が提示し、ヌスバウムの議論が教育思想史にいかん位置づけられるかを、フロアの参加者ととともに議論したい。

なお、本コロキウムは読書会の形式をとるため、参加者には下記の対象文献をあらかじめ読んできていただければ幸いである。

Nussbaum, M. C. (1996→2002). *For Love of Country?* Edited by Cohen, J., Beacon Press. (=2000、辰巳伸知・能川元一 (訳) 『国を愛するということ』人文書院。)

Nussbaum, M. C. (2004). *Hiding from Humanity*. Princeton University Press.

(=2010、河野哲也 (監訳) 『感情と法』慶應義塾大学出版会。)

## 「社会的なもの」と教育 ——政治的可能性に向けて——

企画者

江口 怜（東北大学）、田中 智輝（東京大学）

司会者

小玉 重夫（東京大学）

報告者

江口 怜（東北大学）、石神 真悠子（東京大学・院生）

李 舜志（東京大学・院生）、田中 智輝（東京大学）

「社会的なもの」の概念は、19世紀のヨーロッパで登場し、産業資本主義社会が生み出す貧困等の「社会問題」から人びとを保護する働きを担ったものとして一定の評価を得てきた。他方で、1960年代頃から「社会的なもの」は官僚制機構が肥大化した福祉国家を批判する文脈で重要な論点として提起されるようになる。19世紀以降に拡大する近代教育が規律訓練論・生権力論の立場から批判されるのもこうした文脈においてである。

ただし、理論において「社会的なもの」の権力性が暴かれたからと言って、あらゆる社会保険・社会保障制度を解体すればよいというわけではない。格差是正や他者との共生といった今日的課題との関係において学校教育の在り方を問い直す際、「社会的なもの」を規律訓練・生権力だとして批判するのも、またその権力性を看過し生存保障・権利保障の側面だけを取り出して擁護するのもない、以上の二つに還元されない「社会的なもの」についての新たな視座が必要不可欠だと言えるだろう。このような問題関心から、本コロキウムでは、フーコー、アレントの議論から〈生政治〉の哲学を紐解き、その現代的意義を論じた金森修の知的営為に依拠しつつ、歴史研究および哲学・思想研究の視角から「社会的なもの」と教育の結びつきを解きほぐすことを試みたい。

## 教育と宗教——信仰と生の本来態

司会者

田中 智志（東京大学）

報告者

加藤 守通（上智大学）

西平 直（京都大学）

神門 しのぶ（上智大学・非常勤）

本シンポジウムの主題は、現代社会において教育の在りようを考える一つの縁を、キリスト教を中心としつつ、諸宗教に見いだすことである。いいかえれば、自己を有能な個人主体として確立するという趨勢のなかで、敢えて人の在りようを生成し超越する関係性のなかに見いだすことである。

この試みにおいて、私たちは二つの論点を提示する。

一つは、「世俗化」すなわちキリスト教権威の衰退と、「ライシテ」(laïcité)すなわちキリスト教権威からの自律という、社会的背景である。いいかえれば、キリスト教が全体社会を覆うものではなくなることで、そして経済、政治、教育といった領域（システム）の一つになることである。どちらも近代西洋的現象であるが、現世的生活様態に違背しないライック (laïque) な宗教性——たとえば、ルソーが『社会契約論』でいう「市民宗教」——は、世俗化からではなく、ライシテから生まれる。この宗教性は、ロック、ルソー、カントに始まる近代教育思想を理解するうえで必須であり、また近現代の社会現象である「スピリチュアリティ」を理解するうえでも有益である。

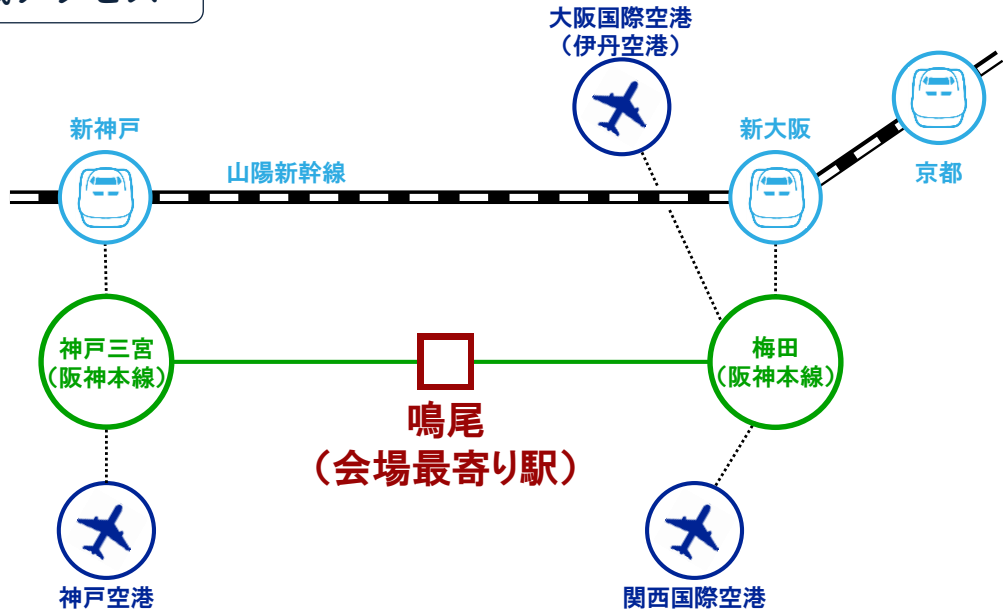
もう一つの論点は、キリスト教思想の「信じる」(信仰)である。通俗的な意味での「信仰」は、自己の「願望」の達成成就を求めるが、本来のキリスト教信仰 (pistis) は、端的にいえば、自己を超えて絶対他者の呼びかけに聴き従うことである。本シンポジウムでは、本来のキリスト教信仰が、アウグスティヌス、ルターにさかのぼって確認されるだろう。予断を述べるならば、ライックな宗教性も、キリスト教信仰も、生の本来的な在りようを含意しているはずである。それは、たとえば、宮本久雄のハヤトロギ

アのいう「ハーヤー」（在る＝成る）が暗示する、生成し超越する関係性に通じているかもしれない。少なくとも、スピリチュアリティやキリスト教を思考から疎斥せず、それらが秘めている力を再確認するならば、私たちは、「絆」「愛」といった言葉を消費摩滅させたり、忌避看過したりすることなく、人びとを真摯につなぐ想いを語ることができるだろう。そしてそれは、現代教育をよりよく創りかえる契機になるのではないか。

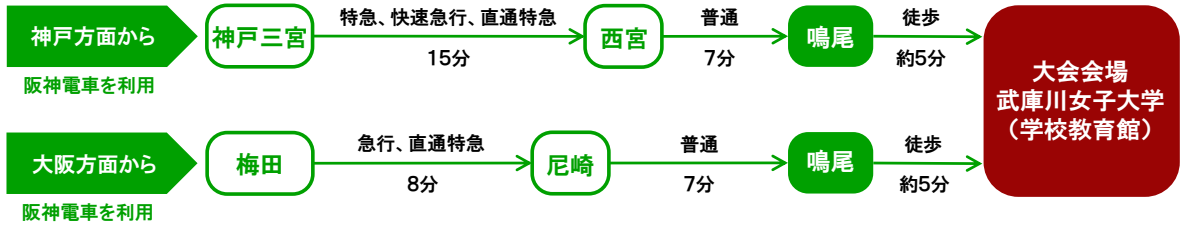
以上の主題と論点をふまえ、加藤氏は、キリスト教のみならず儒教や原始宗教も視野に入れつつ、世俗化を、西平氏は、エリクソンによるルター解釈を通して、また西田幾多郎の「逆対応」とも重ねつつ、「罪びとのまま救われる」という「背理」を、そして神門氏は、現代の生とのつながりを意識しつつ、アウグスティヌスのキリスト教思想の核心部分を論じることになるだろう。

# アクセスマップ

## 広域アクセス



## 大会会場へのアクセス



## 🍴 昼食に関するお知らせ 🍴

大会会場の周辺は、飲食店の数がかなり限られております。ご参加の際には、**昼食をご持参**くださいますようお願い申し上げます。

## 教育思想史学会 事務局

〒565-0871

大阪府吹田市山田丘 1-2

大阪大学大学院人間科学研究科・岡部美香研究室内

Email : [office@hets.jp](mailto:office@hets.jp)